

【大学病院で働くということ】

角田 亘（国際医療福祉大学医学部 リハビリテーション医学教室 主任教授）

* 2015 年に某誌に発表したものを、一部改訂した。

三重県で暮らす私の父は厳しい人で、私は父に褒められた記憶がない。その父が平成 25 年の年末をもって、寄る年波には勝てないとの理由で（および不肖の一人息子が故郷に戻らなかったがために）、約 40 年間にわたってたった一人で切り盛りしてきた有床診療所を閉院した。若かりし頃の父は、本心としては大学に残りたかったようだが、家庭の事情で開業医の道に進んだ。そんな経緯からか今になっても父は、東京からたまに帰省する大学病院勤務の息子に「大学にいて論文を書かないとは何事なのだ（オリジナルは三重弁）」「大学にいてもゴルフに行く暇があるのか」「大学の医者が町医者と同じことしかできないのか」などと小言を吐く。

確かに、“大学病院で働く”ということは、本来は何か“特別なもの”でなければならないのであろう。大学病院には最新の診療機器があふれ、基礎や臨床などと様々な研究に打ち込める環境も備わっている。人的資源も豊富であって、諸先輩から指導を受けることもできれば、同僚や後輩のサポートに救われることも多々ある。こんな恵まれた環境に勤務する医師が「ただありふれた診療を繰り返して、毎日を変わず過ごすだけ」というのであれば、少なからずの医学の先達は違和感を覚えるだろう。大学病院勤務医師であるからこそ“やれること”、“やらなければならないこと”があるはずだ。

私は、“医療”とは、「その時点で行いうる、最良の診療行為を確実に提供すること」であり、“医学”とは「その時点で行いうる、最良の診療行為を前向きに変化させる（進歩・発展させる）こと」と勝手に定義している。そして、開業医や市中病院勤務医には、主に“医療の遂行のみ”が求められるのに対して、大学病院勤務医には“医療と医学の両者の遂行”が求められるものと私は考える。大学病院勤務医と開業医・市中病院勤務医の優劣を論じるのは愚の骨頂であるが、両者間で“求められること”が異なることは間違いない。“求められること”が多い分、大学病院勤務医師の日常は、より過酷になるのであろう。ただでさえ難症例が集まり、常に待合室が患者であふれる大学病院では、医療の遂行だけで心身が消耗される。しかし、である。もしも仮に大学病院勤務医師が医学に時間を割かないとなると、医学の進歩は間違いなく停滞する。もちろん、ナショナル・センターやいくつかの市中病院においても研究活動は熱心に行われているが、やはり研究活動の中心は大学病院なのである。斬新なシステム作りの中心も、前例のない患者支援体制構築の中心も大学病院なのである。大学病院勤務医師こそが、なんらかの変化を創り出さなければならない。

一方、これは“負の側面”とも言えるが、ファイナンシャル的にも大学病院勤務医師は特別で、矛盾にも直面する。完全なる非医療人である私の妻は当初、大学病院の給与の安さに驚愕し、そのような“安月給の職場”を好む夫の感覚を疑った。私は「素晴らしい学問の環境に身を置くために、お金を払っているものと理解しよう」などと妻に説いてみたが、彼女の心にそれが響いたとの感触はいまだない。娘のママ友の中には「大学病院勤務って凄いな！」と言う人もいるようだが、現状を知ってしまった妻の心中では、そんな言葉はただ空しく響くだけ。「大学病院に勤務していること自体は、そんなに凄くない」といまや考える妻に、私は大方合意する。「大学病院で何をしているか？」ということが重要だ。それにしてもやはり、妻はファイナンシャル・プロブレムを重視するため、私は「太った豚よりも、痩せたソクラテスになれ」という某大学総長の言葉を小学 2 年生の娘に諭そうとしたが、結果的に娘には「パパ、結構太ってるよ」と一笑に付され、彼女にとっては時期尚早な言葉であったと心得た。とにもかくにも、大学病院は“安月給な職場”だからこそ、いろんなことに挑戦しないと“もったいない”と私は考えるようにしている。

さらに続けると、ついには職業倫理の問題につきあたる。ここで私が言う職業倫理とは「社会から期待される自らの職業上の責務を、きちんと果たすこと」であるが、結局、人間の価値を決めるのは、勤務場所や役職名などではなくて、その人が「職業倫理をいかにほどに全うしたか」によると思う。確かに一介の開業医であった私の父は、留学をしたこともないし、英語論文執筆の経験も極めて乏しい。しかしながら、父は自らに課せられた職務を潔く遂行した。私たち家族が父の仕事の犠牲になった（父は私の参観日や運動会に学校に来たことはほとんどない）ことは少なからずあるが、父は自分の時間のほぼ全てを地域医療に捧げることで自らの職業倫理を全うした。ここに尊敬の念が生まれることには何の不思議もない。そこで、自らの行いを棚に上げて私は思う。今こ

そ我々は、大学病院勤務医師に期待される職業倫理を見つめなおしたい。もしも、それを全うしていないことを自覚したならば、そこで“後ろめたさ”を感じたい。そして、その“後ろめたさ”を新たなドライビング・フォースとして、大学病院医師としてさらなるステップ・アップを遂げていければと考える。

ただし、敢えて述べると、父のごとくの開業医と私のごとくの大学勤務医を比べた場合、後者ならではのアドバンテージは確かに存在する。大学病院勤務医師であれば、臨床であろうと研究であろうと、最先端で独創的なプロジェクトへのアクセスに利がある。変化をもたらす試みを支援するスタッフがいる。そんな環境の中で成果が出せれば、学会発表や論文報告を通じて日本全国のみならず世界各国にそれを広めることができる。「小医は病を癒す、中医は人を癒す、大医は国を癒す」という中国の古い言葉があるが、残念ながら開業医であった父のもとには、国を癒す機会は訪れなかった。これに対して、大学病院勤務医師であれば、医学的な成果を挙げることで“国を癒す”ことができるかも知れない。そう、大学病院には、いつだって大きな可能性が潜んでいる。中壮年の私が口にするのはいささか恥ずかしい言葉であるが、私が大学病院での勤務を望む最大の理由は、こんな可能性にロマンを感じているからに他ならない。

ところで、診療所閉院後の父はさすがに時間ができたようで、数か月に一度の割ではあるが、私と一緒にプロ野球観戦に行くことができるようになった（なんと父は、医大生時代は硬式野球部の所属である）。ただし、スタンドで観戦中であっても、突然に父から「ところで、最近は大学で何の研究をしているんだ？」などと切り出されることがあるので、年甲斐もなく私は、試合観戦中もなんとなく緊張している。そんな訳で、父との野球観戦は、楽しいようで楽しくなかったりもする。